

受験番号		氏名	
------	--	----	--

2020年度 推薦・社会人入学試験問題（小論文） 全二頁中一頁

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

どの国にも多かれ少なかれ「家族とはこういうものだ」という固定観念があります。

私たちからすれば一見個人主義的に見える欧米の人も、伝統的な家族像から自由ではありませんでした。父親の育休取得率が七割超のノルウェーでさえ、休んでまで育児をすることが同僚にどう見られるのかを気にして、当初は取らない男性が多数派でした。

しかしデータを基に科学的に眺めると、固定観念とは違う家族の姿が見えてきます。

たとえば「子どもには母親が一番」と考える人はまだ多いですよ。ドイツの研究では、生後しばらく自宅で母親に育てられた子どもと保育園などに預けられた子どもとの間に、発達の違いは全くありませんでした。信頼関係があれば、養育者は必ずしも母親でなくてもよいのです。また母乳育児は様々なメリットが言われますが、ベラルーシでの実験では効果はかなり限定的であることが示されました。

これらのデータは、「だから出産後すぐ働いた方がいい」「母乳育児は無駄だ」といった何かしらの「正解」を導くものではありません。何が幸せかは各人によって全く異なるからです。メリットとデメリットを知った上で、自由な選択をするための参考として利用すればいいのです。

一方で、データを使うことで、思い込みだけで他人に特定の選択を強いる「余計なおせっかい」に釘を刺すことはできるでしょう。

たとえば政治家の中には、「シングルマザーが増えると社会の秩序が乱れる」といった理屈を欠いた根拠で、家族のあり方の選択肢を狭める人がいます。たとえその選択に「副作用」がある場合でも、副作用を減らすためにどう公的な援助をするのかを考えることが、政治の知恵の見せどころのはずです。

ひとり親家庭の子どもは経済的に不安定な状態に置かれがちという副作用があります。だからといってその選択を制限するのではなく、家庭環境に関わらず、教育や福祉に大きな差が出ないような政策を考えればいいのです。

一つしか「良いもの」を知らないと、それが絶対と思いがちです。私も離婚が多い社会は大変だと思っていました。カナダや米国で離婚後も交流を続ける親子の姿を見て変わりました。「主観的に家族関係に満足できる」ことがゴールだとしたら、そこに至る道は一つではないのです。

自分とは異なる家族のあり方を選んだ人に対して、どちらが損だ徳だと怒るのものが近視眼的な見方だと思います。たとえば世の中には、子どもを持つ人も、持たない人もいます。持たない人が税金で子育てを支える時期もあれば、人の子に支えられる時期も来ます。自分と他人は、意外とつながっているものです。

（山口慎太郎「固定観念 データが崩す」『朝日新聞』（二〇一九年九月二十五日朝刊）による）

問一 右の文章を二五〇字以内に、常体（だ・である）で要約せよ。（句読点も一字に数える）

問二 右の文章に対するあなたの意見・感想を、具体例をまじえて述べよ。（六百字以上八百字以内）（句読点も一字に数える）